

“ N_1+V 得+ N_2+VP ” 構文における「領属関係」 —— N_1 と N_2 の意味関係を中心に ——

勝川 裕子

0. 本稿の視点

0.1 本稿は、極めて複雑多様な表現形式であるとされる“ N_1+V 得+ N_2+VP ”構文について、 N_1 と N_2 の意味関係に着目し、特に N_1 と N_2 の間に「領属関係」が存在する表現形式について、その統語的・意味的特徴を抽出することを目的としている。¹ また、勝川 2000 において提示した「領属モデル」を援用し、具体的にどのような「領属関係」が“ N_1+V 得+ N_2+VP ”構文の成立に関与しているかについて詳細に検証していく。

0.2 本稿が考察対象とする“ N_1+V 得+ N_2+VP ”構文とは、所謂“得”補語文における補語成分が主述構造をなす表現形式を指す。² 具体的には以下のような表現例が挙げられる。

(0-1) 弑川壘誼厘椎爺絡貧錢状勿短鋒挫。

[小李のせいで、私はその晩一睡もできなかった]

(0-2) 宸鵝焼哉誼磨堽遊廬KK。[この酒を飲んで、彼は頭がクラクラした]

(0-3) 弊順載寄，寄誼低喟垓淚隈岑祇徭失頁壓陳戰。

[世界は君が自分がどこにいるのか永遠に知るすべがないくらい大きい]

(0-4) 慢諸嫖誼返岷窟橋。[彼女は緊張して手がブルブル震えた]

表現例(0-1)から(0-4)における補語成分“ N_2+VP ”は全て名詞性成分 N_2 と述詞性成分VPから構成されており、両者の間には陳述・被陳述の関係——即ち主述関係が存在している。一方、表現例(0-5)、(0-6)におけるVP(“挫逗陽”、“兩剽剽議”)は、 N_1 (“厘”、“析為命”)を叙述しており、“ N_2+VP ”は主述構造をなさない。従って、このような表現形式は本稿の考察対象からは除外する。

(0-5) 厘孀誼低断挫逗陽！ [君たちを探すのに私は随分苦労したよ！]

(0-6) 析為命脅劑誼磨兩剽剽議。 [民衆は彼が憎くてたまらない]

1. “ N_1+V 得+ N_2+VP ” 構文における N_1 と N_2 の意味関係

1.1 蝦穴研 1990 の指摘にもあるように、所謂“得”補語文はその深層構造の相違に基づき、以下の2種類に分類することができる。

(1-1) 磨怒誼載酔。 [彼は走るのが速い／速かった]

(1-2) 磨怒誼畠附頁差。 [彼は走って、全身汗でびしょりになった]

表現例(1-1)は動作(“怒”)の様態を補語成分(“載酔”)が描写する表現形式であるのに対し、表現例(1-2)は2つの分句から構成されており、その間には因果関係が存在する。つまり、表現例(1-2)は、「彼は走った(事柄①)結果、全身汗びしょりになった(事柄②)」と解釈されるのである。表現例(1-1)のタイプには、このような因果関係は存在し得ない。

(1-2) ‘事柄① [原因]	磨怒	[彼は走った]	} 因果関係
事柄② [結果]			
	磨畠附頁差	[彼は全身汗びしょりだ]	

本稿が考察対象とする“ N_1+V 得+ N_2+VP ”構文は、表現例(1-2)タイプの“得”補語文に相当する。即ち、事柄①(“ N_1+V ”)の動作・行為の結果、事柄②(“ N_2+VP ”)が発生したことを表し、両者の間には因果関係が成立する。ここで、事柄①の主語 N_1 と事柄②の主語 N_2 に注目すると、 N_1 は N_2 に対し何らかの影響を与える側であり、逆に N_2 は N_1 の影響を受ける成分であることが分かる。

1.2 本稿では、i) N_1 と N_2 が同一体であるか否か、ii) N_1 と N_2 の間に存在する因果関係が直接的であるか否かを分類基準として設け、“ N_1+V 得+ N_2+VP ”構文を、A B C の3つのタイプに大別する。³ 上の表現例(0-1)から(0-4)を取り上げて具体的に考察してみよう。

1.2.1 A 類： $N_1 : N_2$ 非同一体／直接的影響関係

A 類は、 N_1 と N_2 が非同一体であり、且つ N_1 と N_2 が直接的に影響を及ぼし

あう——即ち事柄①の直接的な影響を受けて、事柄②が引き起こされる——タイプである。従って、事柄①と事柄②の間には必然的な因果関係が存在する。

まず、表現例(0-1) “式川壘誼厘椎爺絡貧錢狀勿短鋒挫”における N₁ (“式川”) は動詞 V (“壘”) の施事であり、N₂ (“厘”) は受事である。従って、N₁ と N₂ の間には「施受関係」が見出される。事柄①“式川壘厘”の直接的な影響を受けて、事柄②“厘椎爺絡貧錢狀勿短鋒挫”が引き起こされたことが読み取れる。表現例(1-3)、(1-4)における N₁ と N₂ もこのタイプに属する。

(1-3) 昂議麼繁卓誼仔昂換遊疋賑，穫嗣穫訊。

[犬の飼主は赤犬を叱り、(赤犬は) うなだれ、びくびくしていた]

(1-4) 柿嶷議丑挨儿誼磨喚音竈賑栖。

[重い悲しみが彼を押しつぶし、彼は息ができなかった]

また、表現例(0-2) “宸鵝燒哉誼磨堽遊廬KK”において、N₁ (“宸鵝燒”) は動詞 V (“哉”) の受事であり、N₂ (“磨”) はその施事である。従って、N₁ と N₂ の間には「受施関係」が存在する。表現例(1-5)、(1-6)における N₁ と N₂ もこのタイプに属する。

(1-5) 黛悶拒本纂宝岷心誼厘講音挫吭房議。

[裸体の彫刻芸術をずっと見ていて、私は非常に恥ずかしくなった]

(1-6) 宸禽傾郭誼厘湊吋阻。[この飯を食って私は腹いっぱいになった]

A 類は、当該構文中において施事と受事が同時に存在することからも明らかのように、V には必ず他動詞が用いられる。また、N₂ を“委”で導き、“委”構文に置き換えることができるのがこのタイプの統語的特徴である。⁴

(1-1) ‘ 式川委厘壘誼椎爺絡貧錢狀勿短鋒挫。

(1-2) ‘ 宸鵝燒委磨哉誼堽遊廬KK。

1.2.2 B 類： N₁：N₂ 非同一体／間接的影響関係

B 類は、A 類と同様、N₁ と N₂ は非同一体であるが、N₁ と N₂ が直接的に影響を及ぼしあう関係にはない。つまり、事柄①と事柄②は間接的な緩い結びつきであり、両者の間には任意的な因果関係が存在する。

例えば、表現例(0-3)“弊順載寄，寄誼低喟垓淚隈岑祇徭失頁壓陳戰”におけるN₁ (“弊順”)は形容詞 (“寄”)の陳述対象ではあるが、N₂ (“低”)とは無関係である。つまり、事柄①“弊順載寄”と事柄②“低喟垓淚隈岑祇徭失頁壓陳戰”はA類に見られるような必然的な因果関係にあるわけではなく、その結びつきは間接的な影響を受けてはいるものの、かなり任意的であるといえる。このタイプの表現形式は極めて多様であり、以下に挙げる表現例(1-7)、(1-8)、(1-9)などもB類に含まれる。⁵ 表現例(1-7)は、事柄①“(慢)珊屁匚議図”を、N₂ (“海源”)が間接的に聞くなどして影響を受けた結果、事柄②“海源勿般音廖伏賑”が引き起こされたことを表す。

(1-7) 喟扮(慢)珊屁匚議図，図誼海源勿般音廖伏賑。

時折(彼女は)夜通し泣き、長富も怒りを抑えることができなかった]

(1-8) (低)哉宸担泣焼祥恪阻，預誼諾墨徨脅頁龍。

[君は)少し飲んだだけで酔ってしまい、吐いて部屋中嫌な匂いがしたよ]

(1-9) 磨断崖恁崖誼厘音孀鋒状。[彼らの口喧嘩で、私は眠れなかった]

B類は、N₂を“委”で導き、“委”構文に置き換えることはできない。

(1-8) ‘*(低)哉宸担泣焼祥恪阻，委諾墨徨預誼脅頁龍。

(1-9) ‘*磨断委厘崖恁崖誼音孀鋒状。

1.2.3 C類：N₁：N₂ 同一体／領属関係

事柄①と事柄②が同一体内で発生することが、C類とA類・B類とを明確に弁別する意味的特徴として挙げられる。事柄①と事柄②が同一体内で発生するということは、事柄①の動作・行為の影響を受け、事柄①が発生した同一箇所において事柄②が引き起こされることを示す。従って、N₁がヒトである場合、N₂はヒトの身体の一部であることが多く、N₁とN₂の間には「領属関係」が存在する。表現例を具体的に見てみよう。

表現例(0-4)“慢諸嫖誼返岷窟橋”では、事柄①“慢諸嫖”の影響が、N₁ (“慢”)の身体の一部である“返”——即ちN₂上に現れ、事柄②“(慢議)返岷窟橋”が発生したことを表しており、N₁とN₂の間には「ヒト—身体の一部」という「領属関係」が存在する。

(1-10) 鷹指欺壘戰，賑誼諾附襟貉。

[彼は部屋に戻ると、怒りで全身が震えた]

(1-11) 勉伏賄誼然脅從阻，岐阻磯認，圭嘉諒祇。

[寿生は驚いて顔が青白くなり、しばらくぼかんとして、やっと尋ねた]

(1-12) 厘心窮喉心誼曉徨脅偶阻。 [私は映画を見て、お腹がすいた]

(1-13) 慢、誼凜商弛攪阻匯訳穴隅。

[彼女は笑って目が線のように細くなった]

上に挙げる表現例 (1-10) から (1-13) における N₁ と N₂ も、全て「領属関係」にあり、事柄①の動作・行為の影響が、そのまま N₁ の身体の一部である N₂ 上に事柄②として発生している。このことから、C 類における事柄①と事柄②は密接な因果関係にあることが分かる。

C 類の統語的特徴としては、主述述語文に変換することができることが挙げられる。⁶ 現代中国語では、所謂主述述語文（“厘語臆黙” [私は腕が痛い]）において、S（全文主語“厘”）と S'（述語部分の主語“語臆”）の間に「領属—被領属、全体—部分」の関係が認められることから、C 類の意味的特徴と一致する。⁷

(1-11) ' 勉伏然賄誼脅從阻，岐阻磯認，圭嘉諒祇。

[寿生は顔が驚いて青白くなり、しばらくぼかんとして、やっと尋ねた]

(1-12) ' 慢凜商、誼弛攪阻匯訳穴隅。

[彼女は目が笑って線のように細くなった]

2. C 類における N₁、N₂ 間の「領属関係」

2.1 前章では、i) N₁ と N₂ が同一体であるか否か、ii) N₁ と N₂ の間に存在する影響関係が直接的であるか否かを分類基準として設け、“N₁+V 得+N₂+VP” 構文を、A B C の 3 つのタイプに大別した。その中で C 類は、事柄①と事柄②が同一体内で発生する点において、A 類・B 類と明確に区別され得る意味的特徴を有しており、N₁ と N₂ の間にはヒトとその身体の一部に代表される「領属関係」が存在することをみてきた。

“N₁+V 得+N₂+VP” 構文において、N₁ と N₂ の間に「領属関係」が存在することを指摘した先行研究は少なくない（穀洗洗 2000、川啓旬 1992、供冴乏 1989、森山 1999 等）。しかしこれら先行研究も、1.2.3 における考察と同様、ヒ

トとその身体の一部といった「領属関係」のみを考察対象に限定している。しかし「領属関係」には、具体的に、手／足／眼／鼻などの「身体部位」以外にも、身長／体重／健康状態／性質／感情などといった狭義の「属性」や、カバン／眼鏡／本など所謂「一般領有物」など様々なレベルの領有物が含まれる。以下、このような「身体部位」、「属性」、「一般領有物」などが“ N_1+V 得 $+N_2+VP$ ”構文の成立に関与しているかどうかについて考察していく。

2.2 勝川 2000 では、「領属関係」を「身体部位」、「属性」、「装着類」、「一般領有物」に下位分類し、且つ可・不可譲渡性の観点から、それら下位分類された「領属関係」が連続体を形成していることを「領属モデル」として提示した。本章では、この分類をもとに、“ N_1+V 得 $+N_2+VP$ ”構文の成立にどのような「領属関係」が関与しているか検証していく。なお、表現例の成立、不成立についてはインフォーマントに判断を仰いだ。「*」は非文を、「?」は不自然、もしくはインフォーマントの意見が分かれたことを示す。

2.2.1 身体部位

(2-1) 川膨識誼然脅碍阻。 [李四は焦って、顔が赤くなった]

(2-2) 慢犯誼遊辻窟肢阻。 [彼女は暑くて、頭がボーっとした]

(2-3) 認旗徨……賄誼伉壘瀚瀚。

[千代子は驚いて、心臓がドキドキ鳴った]

“ N_1+V 得 $+N_2+VP$ ”構文において N_2 が N_1 の「身体部位」であるとき、全て自然な表現として成立する。これは、先行研究における分析結果とも一致する。

例えば、表現例(2-1)は事柄①“川膨識”の影響が、“川膨”(N_1)の身体の一部である“然”(N_2)上に、事柄②“然脅碍阻”という形で現れたことを示している。身体部位(N_2)はその領属先(N_1)の存在なくしては存在し得ない。また、事柄②“ N_2+VP ”が N_1 内で発生する以上、 N_1 と N_2 は「全体一部分」という不可譲渡所有(inalienable possession)の関係にあるといえることができる。従って、 N_1 と N_2 は同一体であると認識され、当該構文が成立するのである。表現例(2-2)、(2-3)も同様に解釈することができる。

2.2.2 属性

- (2-4) 析嫖賑誼僮儿幅互阻。 [老張は怒って血圧が上がった]
 (2-5) 慢郭誼悶疑奥紗阻。 [彼女は食べて体重が増えた]
 (2-6) 磨瓜遁減誼來鯉延撒阻。 [彼はいじめられて性格が悪くなった]

“N₁+V 得+N₂+VP” 構文において N₂が N₁の「属性」であるとき、全て自然な表現として成立した。「属性」には、身長、体重、身体機能などといった準身体的領有関係や、性質、感情、意識といった精神的な領有関係が含まれる。表現例(2-4)は事柄①“析嫖賑”の結果、N₁ (“析嫖”)の身体機能である“僮儿”——即ち N₂の面において、事柄②“僮儿幅互阻”が発生したことを示しており、同様に、表現例(2-6)は事柄①“磨瓜遁減”の影響を受けて、“磨”(N₁)の本質的な性質である“來鯉”(N₂)面において、事柄②“來鯉延撒阻”が引き起こされたことを表している。

「属性」の類も、程度や内容の差こそあれ、それが原則として人間全てに等しく、且つ不可分に領有されているという点で、不可譲渡所有の関係にあるとすることができる。従って、N₁と N₂は同一体であると認識され、“N₁+V 得+N₂+VP” 構文が成立すると考えることができる。

2.2.3 装着類

- (2-7) 𩇑凰柳誼單徨渠壓仇貧阻。 [𩇑凰は飛び跳ねて帽子が地面に落ちた]
 (2-8) 磨砲誼亂脅敬阻。 [彼は転んで靴が飛んだ]
 (2-9) ?式藍瓜嬉誼凜承哩阻。 [王さんは殴られて眼鏡が壊れた]

“N₁+V 得+N₂+VP” 構文において N₂が N₁の「装着類」であるとき、「身体部位」や「属性」よりは文法性が低くなるものの、ほぼ成立する。

勝川 2000 では、「装着類」——身につけた状態の衣類や小物類等が、「身体部位」や「属性」に準ずる不可譲渡性の高い「領属関係」であることを指摘したが、これは“N₁+V 得+N₂+VP” 構文においても適用できる。

表現例(2-7)について言えば、「𩇑凰が飛び跳ねた(事柄①)」結果、「頭にかぶっていた帽子が地面に落ちた(事柄②)」という意味であり、「どこかに置いてあった帽子が地面に落ちた」とは解釈されない。表現例(2-8)、(2-9)

も同様に、事柄①により、 N_1 が身に付けていた N_2 に事柄②が起こったと読み取ることができる。このように解釈して初めて N_1 と N_2 が同一体であると認識され、事柄①と事柄②の間に、因果関係を見出すことができるのである。

2.2.4 一般領有物

(2-10) *麿諸嫖誼鵜徨砲哩阻。

[彼は緊張してコップが落ちて割れてしまった]

(2-11) *析弗賑誼幢漚岷嬉戒。[?先生は怒って竹棒がぶるぶる震えた]

(2-12) *椎逸社誌、誼焼脅備阻。

[あいつらは笑いすぎて酒がみなこぼれた]

“ N_1+V 得+ N_2+VP ” 構文において N_2 が N_1 の「一般領有物」であるとき、全て不自然な表現となってしまう。これは、 N_2 が N_1 の単なる領有物である以上、 N_1 と N_2 が同一体であるとは認識され得ず、事柄①と事柄②の間に如何なる因果関係をも見出すことができないからに他ならない。表現例 (2-10) について言えば、事柄①“麿諸嫖”と事柄②“鵜徨砲哩阻”の間に何ら因果関係が存在しないため、非文となるのである。表現例 (2-10)、(2-11)、(2-12) は、以下に挙げるように領有物 N_2 を N_1 の身体の一部に付着させると容易に成立する。2.2.3 で考察した「装着類」の一種として解釈されるからであろう。⁸

(2-10) ‘麿諸嫖誼返戦議鵜徨砲哩阻。

[彼は緊張して、手に持っているコップが落ちて割れてしまった]

(2-11) ‘析弗賑誼返戦議幢漚岷嬉戒。

[先生は怒って、手に持っていた竹棒がぶるぶる震えた]

(2-12) ‘椎逸社誌、誼返戦議焼脅備阻。

[あいつらは笑いすぎて、手に持っていた酒がみなこぼれてしまった]

2.3 以上本章では、勝川 2000 における「領属関係」の下位分類に基づき、“ N_1+V 得+ N_2+VP ” 構文成立にどのような「領属関係」が関与しているかについて考察した。その結果、「ヒトー身体の一部」といった「領属関係」だけでなく、「属性」や「装着類」等も“ N_1+V 得+ N_2+VP ” 構文成立に大きく関与していることが明らかとなった。

3. “N₁+V 得+N₂+VP”構文における「領属関係」の連続的位置付け

3.1 第2章では、「領属関係」を「身体部位」、「属性」、「装着類」、「一般領有物」の4つのタイプに下位分類し、それら「領属関係」と“N₁+V 得+N₂+VP”構文の関係について考察してきたが、ここで、当該構文の成立度という観点から「領属関係」を捉えると、当該構文における「領属関係」には以下のようなclineが存在することが分かる。

(3-1) “N₁+V 得+N₂+VP”構文の成立度

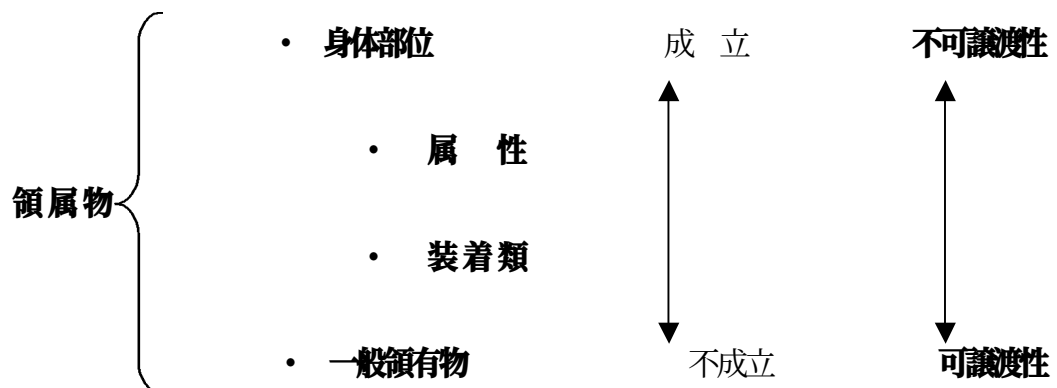
N₂ : 身体部位 > 属性 > 装着類 > 一般領有物

図(3-1)は、N₁の領属物であるN₂が、左よりであるほど当該構文は成立しやすく、右よりであるほど成立が難しくなることを示している。これは“N₁+V 得+N₂+VP”構文において、領属先N₁と領属物N₂との不可分性、同一性が構文成立に大きく関与していることを示唆している。

3.2 また、このclineは勝川2000において提示した「領属モデル」と完全に一致する。このモデルは、可・不可譲渡所有の概念の援用を通じて、領属性“被”構文(“磨瓜式裕裕恠阻熱淫”)の成立度を分析することにより得られたものであるが、“N₁+V 得+N₂+VP”構文においても適用できることから、この「領属モデル」が現代中国語において、ある程度普遍性を有するモデル体系であると主張することができそうである。

(3-2)

“N₁+V 得+N₂+VP”構文の成立度



4. 今後の展望

本稿では、“N₁+V 得+N₂+VP”構文について、N₁とN₂の意味関係に着目し、特にN₁とN₂の間に「領属関係」が存在する表現形式について、その統語的・意味的特徴を分析した。また、勝川 2000 において提示した「領属モデル」を援用し、「身体部位」、「属性」、「装着類」などの「領属関係」が“N₁+V 得+N₂+VP”構文成立に大きく関与していることを論証した。また、“N₁+V 得+N₂+VP”構文の成立度に関する cline は、勝川 2000 において提示した「領属モデル」と完全に一致することが明らかとなった。しかし、これが中国語話者の「領属」に対する一般的な認知能力に依拠する、普遍的な概念体系であるか否かについては、今後、他の言語現象も取り上げ、検証を重ねていく必要がある。

註

- 1 “N₁+V 得+N₂+VP”におけるN₁、N₂は名詞性成分を、Vは動詞もしくは形容詞を、VPはそれらからなる述詞性成分をそれぞれ表す。
- 2 一般に“V 得”に後続する補語の名称には、程度補語・状態補語・様態補語などが挙げられるが、それぞれが規定する概念範疇は大きく異なる。本稿では、“V 得”の後ろに補語成分を伴う表現形式を“得”補語文と称することにする。
- 3 N₁とN₂が同一体であるか否か、とは事柄①“N₁+V”と事柄②“N₂+VP”が同一体内で発生するか否かを指す。
- 4 この点については、川匠協 1963、供冨乏 1989 に詳細な記述がみえる。また、表現例(0-1)タイプは“厘瓜式川壑誼椎爺絡貧錢狀勿短鋒挫”のように“被”構文に置き換えることもできる。表現例(0-2)タイプはこれができない。“磨瓜宸鵲燒哉誼堽遊廬KK”
- 5 B類の多様性については、森山 1999 を参照。
- 6 C類を主述述語文に変換すると、文のニュアンスが変わるもののあることを川啓旬 1992 は指摘している。例えば、C類：“磨黙誼返岷橋”[彼は痛くて手が震えた]において「痛い」のは必ずしも“返”とは限らないが、これを主述述語文に変換した“磨返黙誼岷橋”[彼は手が痛くて震えた]においては、「痛い」のは必ず“返”であると解釈される。
- 7 主述述語文には、本稿で指摘したような、SとS'が「領属—被領属、全体—部分」の関係にあるタイプ以外にも、S(もしくはS')が後に続く動詞の受動者であるタイプ(“椎訳噬豎郭渠阻”)や、Sが道具であるタイプ(“宸陝凜承厘心慕喘”)なども含まれる。詳しくは、幀蟻烈 1982: 106—108 参照。
- 8 「装着類」は“\$ 凰柳誼遊貧議単徨渠壓仇貧阻”のように、装着先を明記せずとも成立するが、「一般領有物」は“磨諸嫖誼返戰議鵲徨砲哩阻”のように領有

物 (N_2) を領属先 (N_1) に必ず付着させなければ成立しない。「一般領有物」を「装着類」として見なすために、このような操作が必要になると考えられる

参考文献

- 蝦穴研 1990. *The So Called De Complement Construction*, 《㊿旗囂互僥胎還 廠 14 忽囂議鞘徨嚙徨鞘潤更》, 岬羅僥伏慕蕉咫佩。
- 殼洗洗 2000. 〈“ N_1+P_1 誼+ N_2+P_2 ”鞘塤嶺 P_2 議囂呐峴KK〉, 《囂互》, 遍脅弗袈寄僥竈井芙, 125 - 137 頁。
- 供呀乏 1989. 〈“ N_1+V 誼+ N_2+VP ”鞘塤〉, 《嶺忽囂獵》及 3 豚, 191- 192 頁。
- 川啓旬 1992. 〈麼僚温囂鞘〉, 《弊順查囂縮僥》及 3 豚 冷查寄僥竈井芙, 187 - 193 頁。
- 川匝協 1963. 〈揮“誼”忖議温囂鞘〉, 《川匝協徭僉鹿》, 采捆縮圀竈井芙, 12- 47 頁。
- 装垵鯖吉 2001. 《糞喘㊿旗查囂囂隈》, 斌曆咫慕鋼, 596 - 604 頁。
- 个淺膿・嫖冉囑 1990. 〈“ N_1+V 誼+ N_2+VP ”鞘塤灘呐蚩裂〉, 《囂互縮僥嚙寫梢》及 3 豚, 141 - 147 頁。
- 幀蟻烈 1982. 《囂隈讐呐》, 斌曆咫慕鋼, 106 - 108 頁。
- 森山美紀子 1999. 〈麼僚温囂鞘議囂呐潤更寫梢〉, 《查囂僥樓》及 1 豚 21- 25 頁。
- 勝川裕子 2000. 「“被”構文における「領属関係」とその連続的位置付け」, 『ことばの科学』第13号, 名古屋大学言語文化部言語文化研究会, 157- 170 頁。